

【国際交流留学センター】

本センターでは、受け入れ留学生への日本語日本文化教育とともに、国際的視野を持った教員の養成に資することを目的とした教員養成大学ならではの国際交流事業を展開しています。設立7年目となる2020年度は新型コロナウイルス感染拡大のため、例年よりも規模を縮小し、また内容も変更して、(1)受け入れ留学生教育の運営、(2)学内における異文化交流の活性化、(3)派遣留学生の奨励と支援、(4)附属学校園や地域と連携した国際交流の推進、の活動を行いました。活動成果の詳細は、以下の通りです。

(1) 受け入れ留学生教育の運営

2020年度、本学では、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカなど、さまざまな国から前期は44名、後期は37名の留学生を受け入れました。その中には、文部科学省の奨学金を得て、日本の教育事情を研修するために留学している海外の現職教員（教員研修留学生）がおり、2019年10月からの半年間の日本語集中研修を経て、今年度4月から本学での専門教育研修に参加しました。それぞれの研修課題について指導教員の下で調査研究を行ったり、関西圏の学校現場で児童生徒や教員と交流を行ったりしました。また当センターが提供する日本語・日本文化プログラムにも参加し、その成果として、3月には日本での研修生活について日本語で発表を行いました。

日本のイメージ



日本に来る前からイメージがありました

まじめな国
グレーのまち



漢字はモノトーンみたいでしたが、その練習は とてもカラフルで すばらしい思い出です。



また本年度前期には本学が協定を結んでいる4ヶ国4校の交換留学生8名、文部科学省奨学金プログラム日本語日本文化研修留学生は7か国から7名が本学に在籍しました。交換留学生・日本語日本文化研修留学生は2019年10月に来日し、奈良で留学生生活を送っていましたが、留学途中で本学での教育プログラムはオンライン実施、または中止となってしまいました。母国から遠く離れた日本での非常事態下での留学は思い描いたものと大きく異なり、不安も大きかったと思いますが、前向きに、そして協力的に研修に取り組み、8月にはオンライン修了発表会で留学中の研究成果を披露しました。



後期からは本学協定校の西安外国語大学からの交換留学生2名、日本語日本文化研修留学生4名を受け入れています。またその他にも、私費での学部生、大学院生、学部研究生が本学で学んでいます。これらの留学生の中には渡日後2週間の隔離生活を経て奈良での生活を始めた者、2021年3月現在、渡日の目途が立っておらず、自国から授業等に参加している者もいます。

このように対面での活動が制限される中、授業以外にもオンラインを活用した教育プログラムの提供にも挑戦しました。例えば、2月には本学技術教育専修（担当：世良啓太先生）の協力のもと、大学、本学国際学生宿舍、中国をつないで、3Dプリンターを使った「灯ろうづくりワークショップ」を開催しました。また3月にはオンラインで「和菓子作り」の文化体験を行いました。

なお、留学生が少しでも安心して留学生活を送れるように、本学では新型コロナウイルス感染拡大に伴う政府や大学の対応、生活支援のための情報を英語で提供する「留学生支援サイト」を開設し、留学生への支援の充実に努めています。



今年度本学への留学を希望していた留学生の中にはやむを得ず留学を辞退した者もいましたが、来年度は例年のようにより多くの留学生を受け入れられるようになることを願っています。

(2) 学内における異文化交流の活性化

① 留学生・日本人学生の共修機会の提供

本学では、留学生と日本の学生とが共に学び合える機会を多く提供しています。今年度前期は、留学生科目「日本語文献講読（言語）」の授業で、「教育課程演習（担当：橋崎頼子先生）」を受講する日本人学生有志とのオンライン合同授業を行い、日本国内外の教育制度や問題について意見交換を行いました。また後期には、留学生科目「日本語コミュニケーション」と「教育課程特講」（担当：橋崎頼子先生）で、10月から本学に留学している留学生と「教育学特講」受講生とのオンライン特別授業を行いました。キャンパスへの入構が制限された状況下において、貴重な学び合いの機会となりました。

②学内における国際交流活発化のための取り組み

授業以外でも、国際交流の場を用意し、留学生と日本の学生とが出会える機会を多く提供しています。例えば、現在、約 35 名の学生が留学生サポーターとして活動しています。1月 22 日には留学生とサポーターとの顔合わせ会をオンラインで開催し、サポーターが「節分」について紹介したり、一緒に折り紙を折ったりしました。その後も留学期間を通して親交を深めています。



また 10 月 5 日～10 月 16 日には本学図書館にて「世界の絵本をのぞいてみよう」を開催し、本学留学生寄贈の絵本約 80 冊を本学図書館で展示しました。



さらに、コロナ禍で自由な交流が制限される中で、学生たちの国際交流を後退させないように、本センターでは、海外の協定校とオンラインでつながるプログラムも

試行しました。セントラルミシガン大学で日本語を学ぶ留学生有志と本学学生をマッチングし、日本語・英語の交換レッスンをする「言語交換プログラム」もその一つです。また同大学で第 2 言語としての英語教育法を学ぶ学生と本学の学生をマッチングし、英語で交流を行う「カンパセーション・パートナープログラム」も初めて行いました。コロナ禍は私たちに多くの犠牲や我慢を強いています。これらオンラインでつながる試みは、この未曾有の非常時に生まれた、国際交流の新しい可能性と言えるでしょう。

また、1月 25 日には、本センター主催で、「文化的言語的に多様な子どもたちの支援を考える」と題したシンポジウムを開催し、奈良市教育委員会学校教育課から指導主事の中西利彦氏、日本語指導コーディネーターの植田央子氏を迎え、外国人児童生徒等の教育に関わったご自身の経験について語っていただきました。本学の学生にとって、学校現場の多文化化に伴う課題からグローバル化がすすむ社会で必要とされる教員の資質や能力とは何かを考える機会になりました。

(3) 派遣留学の奨励と支援

日本の学生の海外留学が促進される中、新型コロナウイルス感染拡大のために留学の中断を余儀なくされた 3 名の学生のオンライン帰国報告会を開催しました。留学期間を全うすることは叶いませんでしたが、多くの学びを得、大きく成長していることがわかる発表内容に、報告会参加学生は大いに刺激を受けていました。また 2020 年 8 月より、国際交流協定校のアメリカ・ロックヘイブン大学へ 2 名、セントラルミシガン大学へ 2 名、そして華東師範大学へ 1 名を派遣予定でしたが、新型コロナウ

ウイルス感染拡大のため、すべての派遣が中止となっ
てしまいました。渡航を伴う留学が困難な状況の中で、新
たな留学の形態も模索されています。華東師範大学派遣
予定だった学生は、同大学等のオンライン中国語講座を受
講し、来年度の派遣の機会に備えています。

派遣留学生に対しては、本学の支援奨学金制度に加え
て、2021年度は「海外留学支援制度短期研修・研究型(協
定派遣)」が採択され、派遣留学支援の後押しになるこ
とが期待されています。

本センターでは、今後も学生支援課と連携して、派遣
留学の推進に努めるとともに、協定校が提供するオンラ
インプログラムに関する情報収集や新たな派遣留学の可
能性の模索と促進に取り組んでいきたいと思ひます。

(4) 附属学校園や地域と連携した国際交流の推進

① 附属学校園との連携

本学では、留学生と日本の学生とが共に、附属校園で
さまざまな実践を行っています。例年は、交換留学生、
大学院留学生が本学の附属幼稚園、小学校、中学校での
交流を通して多くの学びを得ていますが、今年度はそれ
らのほとんどが中止となりました。そのような中で、11
月には、教員研修留学生が附属小学校5年生の「外国語」
の授業に参加し、児童に対して自国の文化、言語を紹介
しました。



しつもん)
ミャンマーの小学生たちの制服の色は全国みんな同じで
す。なに色ですか。

- ①上は白、下は黒
- ②上は白、下は青
- ③上は白、下は緑

以上のように、本センターでは、留学生に対して日本
語日本文化教育を提供するだけでなく、留学生プログラ
ムを核にして、学内における国際交流の環境を醸成する
と共に、その活動内容や成果を必要に応じて学内外へ発
信しています。また、海外協定校派遣留学生が得た成果
を、帰国後に学内に効果的に還元させることにも取り組
んでいます。その他の活動の詳細は、国際交流留学セン
ターのホームページ (<http://cies.nara-edu.ac.jp/>) で紹介
しています。

本センターは、本学の国際交流の基本方針の一端を担
っています。次年度も引き続き、留学生プログラムの充
実に努めるとともに、日本の学生と留学生との共修や、
附属学校園等との連携につとめていきます。そして、留
学生教育と連動させながら、グローバルな視点に立った
教員養成に資する活動を行っていく所存です。